

平成23年4月4日

左京区 伝統行事 ネットワーク かわらばん

第10号 発行：左京区役所区民部総務課

左京区役所では、区内に数多く守り伝えられている伝統行事を将来にわたって保存・継承するとともに、その魅力を広く発信し観光振興に役立てるため、「左京に息づく伝統文化の保存・継承と観光振興」に取り組んでいます。3月10日に「第12回の左京区内の伝統行事の保存会等によるネットワーク会議」を開催しましたので、お知らせします。

第12回 左京区内の伝統行事の保存会等によるネットワーク会議

- ・日時：平成23年3月10日（木）午後2時～3時30分
- ・場所：左京区役所 第3会議室
- ・内容：
 - ・講演「民俗行事・民俗芸能をめぐる現状と課題」
講師 佛教大学 歴史学部 歴史文化学科 教授 八木 透 先生
 - ・意見交換
- ・参加：16 団体 20 名（一乗寺八大神社剣鉾保存会、一乗寺郷土芸能保存会、石座神社奉賛会、大原伝統文化を守る会、上高野念仏供養踊保存会、久多花笠踊保存会、久多山の神・お弓保存会、鞍馬火祭保存会、修学院紅葉音頭保存会、大文字保存会、広河原松上げ保存会、広河原郷土芸能保存会、松ヶ崎妙法保存会、松ヶ崎題目踊・さし踊保存会、八瀬郷土文化保存会、吉田剣鉾保存会）

講演内容



○現在の日本社会は非常にグローバル化（国際化）しており、我々が認識するしないに関わらず、外国と密接に関わりながら社会生活を送っている。民俗行事・民俗芸能についてもこのグローバル化の流れを無視して考えることはできない。

○これまでの行政における「文化財」とは、その形式や作法をできるだけ変えないで保存継承すべきとの考え方が主流で、文化財行政は、この「凍結保存」の考え方に沿ったものであった。

○いわゆるハッピーマンデー法により、成人の日や体育の日など、国民の祝日の一部が従来の日付から各月の第2月曜日に変わった。この法改正により、例えば、これまでは10月10日に行っていた祭りを毎年違う日に行う必要が生じるなど、保存会においても様々な苦労や混乱があったと聞いている。

○ハッピーマンデー法とともに、民俗行事・民俗芸能に大きな影響を与えたのは、行政の側において、行事を保存・継承するとともに、観光振興や地域振興に活用する動きができたことである。こうした大きな変化がこの10年の間に起こっている。

- 最近は、全国各地で「民俗芸能大会」などの名称で、地域の文化会館等の舞台上で伝統行事を見せるイベントが開催されている。例えば、世界無形文化遺産に登録された岩手県の早池峰神楽（はやちねかぐら）を活用したイベントでは、大規模なドーム会場で2日間にわたって全国の様々な神楽が披露され、数万人の観光客が集まった。
- 民俗行事・民俗芸能は、決められた日に決められた場所で決められた人によって行われるものであり、そこには必ず神や仏に対する信仰や人々の祈りが存在する。そのため、こうしたイベントは祭りの原点からかけ離れたものとの批判もある。一方で、多くの人に見てもらうことで保存・継承に向けた意欲が高まるとの意見もある。
- 京都の民俗行事・民俗芸能の多くは数百年近くにわたって保存・継承されてきたが、江戸、明治、大正、昭和、平成とめまぐるしい時代の変化を経て、実際の行事の現場では様々な変化が生じている。そうした変化があることは当たり前のことではあるが、その中でも必ず守るべき部分と変えてもいい部分があり、それを見極めることが重要である。
- 例えば、祇園祭の山鉾巡行は、昭和40年までは神輿渡御に合わせて7月17日と24日の2回行われていたが、観光客誘致や交通規制等の様々な状況の中で17日に一本化された。これは祇園祭の本来の意味からすると大きな質的变化であったと思う。
- 多くの伝統行事と同様に祇園祭でも行事を支える人材確保が大きな課題である。そこで考えなくてはならないのが「グローバル化」である。実際、今日の祇園祭は、留学生や地方出身の学生の応援によって支えられている。こうした町外の人を単なる労働力としてではなく、行事への想いや心を伝えながら育成していくことが保存・継承につながる。
- 京都は日本の中でも古い歴史文化が凝縮しており、京都の人はあまり「グローバル化」を意識していないが、実は国際化がかなり進んでいる。最近、祇園祭のちまきのクマザサ、五山の送り火の赤松の割木、鞍馬の火祭のミツバツツジなど、祭りにかかせない材料の確保が切実な問題になっており、海外の物を使う必要がでてくるかもしれない。民俗行事・民俗芸能を単に続けるだけでなく、伝統を守りながら、もう少し広い視野で、新しい時代に見合った形に変化させるところは変化させて保存継承することが求められる。

意見交換

【石座神社奉賛会】 最初から祭り本番の神輿をかついでもらうのは難しいので、練習台を設けて地域の若者に参加を呼びかけたところ、段々とつながりができ、今では外国の人なども神輿に参加するなど活気がでてきた。

【久多花笠踊保存会、久多山の神・お弓保存会】 久多地域でも少子高齢化により行事の後継者不足が深刻であるが、ここ2、3年は、次の世代の人が月1回程度ではあるが地元に戻ってきて行事に関わってくれるようになった。特に花笠踊の歌は楽譜がなく、口伝で覚えてもらうしかないのが大変であるが、若い人が前向きなので何とか行事を守り伝えていきたい。

【吉田剣鉾保存会】 地域の小学校の部活動で剣鉾を取り入れ、現在は15人ほどの子どもが練習している。地域でも剣鉾の練習を定期的に行っており、京都大学の外国人も参加するなど輪が大きく広がっている。

【修学院紅葉音頭保存会】 一時は地域の10人くらいしか紅葉音頭を踊れないような状況であったが、綿菓子や焼きそばなどを出し、まずは子どもを集めることから取り組んできた結果、この3年ほどで参加者も増え、盛大に紅葉音頭を踊れるようになってきた。

